2011年3月11日発行（毎月1回11日発行） Vol.71（3）／通刊第821号（再刊第779号） 昭和21年6月27日第三種郵便物認可 ISSN 0289-0909

日本歯科評論 3

THE NIPPON DENTAL REVIEW

March 2011 No.821 Vol.71（3）

神奈川歯科大学　人体構造学講座　肉眼解剖学・臨床解剖学分野
高橋常男先生ほか <私の研究室から>本文9頁

〈 特 集 〉

う蝕治療を見直す——歯髄保護の観点から

桃井保子・清村正弥・清水明彦・畦森雅子・赤峰昭文・杉山精一

安全・スムーズな根管形成テクニック——基本を再確認して行う臨床手技のポイント

岡崎啓介

"DH"あなたの出番です！

"知りたい！ わかりたい！"から始まるコミュニケーション

髙信有希・吉田秀人

HYORON
http://www.hyoron.co.jp

臨床歯科医の独り言

Oral Physicianの世界へ

なかはら　えつお
中原　悦夫
医療法人社団協立歯科　クリニーク デュボワ
〒100-0011　東京都千代田区内幸町1-1-1　帝国ホテルプラザ4階

Dentistが公共事業的歯科医療の担い手であれば，Dental Artistは患者の感性を捉えた上で自らの個性を開花させた診療の担い手であることは，先月号でも述べたとおりである．表現を変えると，Dental Artistとは，近代西洋歯科医学（Dentistry）として医科から切り離されたDentistが，研究の細分化や臨床の専門化によりさらなる分業を経て，Interdisciplinary Approachという流れの中で再び集学的に構成された医療スタイルに自由を求めて歩んできた姿とも言える．また，新たに開発された歯科材料や歯科医療機器等の手助けを得て，完成度の高い歯科医療を実現してきた立役者でもある．しかしDentistもDental Artistも，治療を中心とした回復的歯科医療の範疇におけるスタイルに過ぎない．

リスクコントロール

近代西洋歯科医学の集大成とも言える最新の歯科医療の成果は，当然，良好な口腔環境を取り戻した上に成り立っている．それはまさしく，予防医学と並行して確立されてきたことを意味する．いったん良好な口腔環境を取り戻した後は，歯，歯肉，歯列，咬合の状態，あるいは歯の色の状態を，いかに生涯維持し続けるかに尽きる．その意味ではDental Artistは，創造的歯科医療の領域も一部担っていると言える．おおむね現在の歯科医療の最先端は，一般臨床医の治療や専門医の治療を中心としたInterdisciplinary Approachに沿った回復的歯科医療と，予防概念を併せ持つ初期の創造的歯科医療にあると思われる．

“口腔内細菌のコントロール”ができれば，齲蝕リスクや歯周病リスクは抑えることができる．さらに“免疫力のコントロール”として加齢や全身疾患との関わり，遺伝性因子の関わり等をコントロールできれば，さらにそのリスクを下げることに貢献するだろう．一方，クレンチングやブラキシズムを引き起こす“力のコントロール”ができれば，咬耗症，歯牙破折，不正咬合，あるいは顎関節症やそれに伴う不定愁訴等のリスクの軽減につながる．クレンチングやブラキシズムの根本的な解明のためには，交感神経や副交感神経，ストレス，睡眠，ホルモン，あるいは脳内物質のバランス等の大脳生理学を中心とした脳科学分野を取り込む必要性がある．また，分子栄養学を中心とした食物に関する研究や，月の周期と生理周期の関係，体内時計に見られるような太陽と生体リズムの関係のように，地球と月と太陽あるいはその他の天体との天文学的関係やその運行と生命の関係等に取り組んでいかなければ解明しないだろう．

治療と予防の両立が進めば，いずれ治療が減少し，予防が大きなウエイトを占めるようになる．すなわち，回復的歯科医療が減少するにつ

れ，今度は予防やアンチエイジングをはじめとする創造的歯科医療が需要の中心になり，そこで将来的歯科医師像である口腔内科医（Oral Physician）が登場する．もっとも，欧米に見られるような口腔外科医（Oral Surgeon）のように，医科歯科ダブルライセンス化に準じた制度への移行の後，一本化していくのかもしれない．いずれにしても，創造的歯科医療が成熟期に到達するのは，まだだいぶ先の話である．

臨床検査の重要性

東京歯科大学臨床検査学研究室の井上　孝教授は，歯科診療における口腔臨床検査の導入をいち早く呼びかけている．歯科医師の Oral Physician 化の第一歩であるが，唾液，血液，あるいは尿から検査し得る全身の機能を把握した上での口腔内処置の必要性を訴えている．学会を立ち上げ，さらに現行の医療保険制度に導入することで，Dentist 向けにその普及をもたらそうという取り組みを進めている．

Dentist にとって全身の臨床検査データの必要性はまだまだ少なく，高齢化による有病率の増加に対する偶発症の予防的把握といった概念から根付くだろう．創造的歯科医療にも踏み込んだ Dental Artist であれば，その必要性は十分理解できるはずだ．自らのゴールとして Oral Physician を思い描く歯科医師であれば，臨床検査が必須であることは十二分に理解できる．今後はアンチエイジング医学が進歩するにつれ，毛髪検査や DNA 検査も普及し，流れに乗る形でさらなる一般臨床検査が普及していくと思われる．歯科の臨床現場でも大いに期待されよう．

口と肛門と生殖器は，生命の発生時から存在してきた．いわば生命の基本“食と性”の担い手である．内臓の最先端突出部である口と顔は，まさに生体のコックピットであり，健康な身体のコントロールに必要なさまざまな情報が集中しているはずである．東洋医学による舌診もその１つである．口腔周辺にはわれわれの知らない情報がまだまだ潜んでいる可能性は高く，それがあらゆる疾患の予防に結び付く可能性も十分に考えられ得る．

＊

Dentist と Dental Artist，そして Oral Physician……それぞれの像には決して優劣は存在しない．その時々の口腔環境の置かれた状況，時代の流れ，需要の変化に対し，われわれ歯科医師の取るべき姿であっただけに過ぎない．もしこの新たな歯科医師像が本当に実現したなら，数世紀をかけて人類が挑戦してきた歯科医療の変遷に対する勝利であり，医科への合流が再び待ち受けている．

“個性の開花”と“自由度”，これこそが回復的歯科医療から創造的歯科医療へのパラダイムシフトに必要な，われわれ歯科医師に求められる要件ではないだろうか．